

## ●伊東勢出陣知らせる

鰐塚おろしが吹きぬける晩秋になると、田野町の広い大地には、大根干しのやぐらが立ち並ぶ。高さ六メートルほどのやぐらに二―三本ずつ束ねた大根が、びっしりとつり下げられる。十数日干された大根は漬物工場で加工され、全国に知れ渡った田野名産の漬物になる。

その田野町に真夏の八月下旬、大太鼓が鳴り響く。直径二メートル近い大太鼓を十一個も並べて打ちまくる「大鼓フェスティバル」である。町などで実行委員会を設置、昨年在十回目の開催だった。今では田野の夏を彩るイベントとして知られるようになった。

田野と大太鼓の由来をたどると――。

戦国時代、日向の中央部を支配するようになった伊東氏は、島津氏と対抗して覇権を争った。文明十七（一四八五）年、伊東祐国（すけくに）は、八千余の大軍で飢肥に攻め入ったが、敵陣

に深入りし過ぎて討ち死にした。以後永禄十一（一五六八）年まで、飢肥は伊東と島津氏が取り合う場となった。

その間、三股地方も両氏の争うところとなり、田野から天神越で山之口に向かう道は、重要な通路となった。このとき伊東勢の出陣を知らせたのが大太鼓で、それが響くたびに、田野衆は戦場に走ったと思われる。

時代が過ぎ、太平の世となった江戸時代、大太鼓の役割も変化して雨ごいに使われるようになった。明治の中ごろ、日照りが続いた年があった。村では大太鼓で雨ごいをすれば、雲を震動させて雨を呼ぶだろうと、太鼓を打ち鳴らしたところ雨が降り始めた。以後「雨太鼓」と呼ばれるようになり、今に伝えられたとされる。

昔は、集落ごとに大型の太鼓を競ってつくったといわれているが、近年は大太鼓の胴にする大

木の入手が困難になり、それもなくなった。現在町内十一地区に太鼓が伝承されており、うち四個が町の文化財に指定されている。

「大鼓フェスティバル」では大太鼓のほか、さまざまな大きさの太鼓を組み合わせ、変化に富んだ演奏が繰り広げられる。子供たちも参加、太鼓芸能の里を演出する。

田野町にはこのほか、棒踊り、城攻め踊りの伝統芸能が伝えられている。特に城攻め踊りは、一九七七（平成九）年、米国・サンフランシスコの桜祭りに出演、人気を呼んだ。踊り手が背中を立てている色とりどりの柳の美しさが観衆を驚かせたという。

甲斐亮典



太鼓フェスティバル。大太鼓11個の競演が会場を圧する